

## V. 調査のまとめ

### 1. 渕ノ上古墳の年代について

谷田川流域の古墳同様、石室には榛名山ニツ岳噴出の角閃石安山岩が使用されており、6世紀中頃以降の築造となる。

埴輪を伴うことは、舟山古墳、道明山古墳、天神下古墳、松之木古墳、中古墳など共通例が多いが、渕ノ上古墳の北西約500mに位置する筑波山古墳ではこれまでの調査で遺構と結びつく埴輪の出土例が見られない。

渕ノ上古墳においては、出土した埴輪片は円筒埴輪だけでなく、遺構とは結びつかないものの形象埴輪や朝顔形円筒埴輪も数多く見られる。こうしたことから、本古墳は谷田川流域に分布する古墳群の中でも比較的早い時期に築造されたものと推定される。

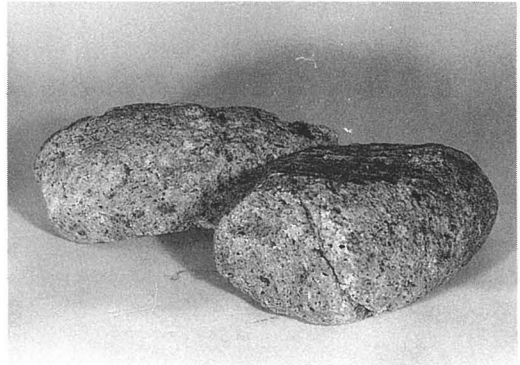


写真6 渕ノ上古墳出土 角閃石安山岩

### 2. 渕ノ上古墳と利根川中流域の古墳

館林市とその周辺の古墳は、地理的環境によりいくつかの「地域」に分けられる。つまり高根古墳群、日向古墳群、中日向古墳群（栃木県足利市）、松本古墳群（邑楽町）などの矢場川流域に分布するグループと、渕ノ上古墳、筑波山古墳（板倉町）、稲荷塚古墳（明和村）などの谷田川流域に分布するグループである。

今回の発掘調査により、渕ノ上古墳は立地以外の点で谷田川流域の古墳群と共通性があることが判明している。それは、石室に使用された石材と玄室の平面形の2点である。

楕円形の玄室は「胴張り型」と呼ばれ、群馬・埼玉を対象とするこれまでの研究では、羽子板・小判・三味線・馬蹄の4つの型に分類されている。このうち渕ノ上古墳の石室の平面形は馬蹄形に該当する。

周辺の古墳中同じ形の石室を有していたのは筑波山古墳と稲荷塚古墳である。

筑波山古墳は国道354号線バイパスの北側の集落内に所存する全長約53.5mの前方後円墳である。現在、筑波山神社の境内地になっているが、昭和8年の社の建替えの際に石室が発見されている。当時の郷土史家飯塚多右衛門氏はこの状況を示す写真を撮影し（写真7 館林市立資料館蔵）、「昭和8年12月25日伊奈良村大字岩田風張筑波神社境内整理ノ為底内掘下シナス際古墳ニ掘り当中ヨリ人骨及金環等ヲ発掘ス。写真ハ墓ノ周囲ノ石垣ノ一部ナリ昭和8年12月26日

撮影」という説明を添えている。その写真によると玄室は渕ノ上古墳と同じ馬蹄形を呈するものと推定できる。また、石室に用いられた角閃石安山岩の一部は現在、神社の階段に利用され、境内には天井石に用いられた栃木県葛生町産出の石灰石を見ることができる。

稲荷塚古墳は現存しないが、昭和28年群馬大学によって発掘調査が行われている。『明和村誌』（1985年刊）に掲載された石室平面図を見ると、玄室の長さ、幅が渕ノ上古墳と同様な石室であったことが推定できる。

群馬県内における「胴張り型」石室は、羽子板形と小判形が多く、馬蹄形の分布は谷田川流域に限られる。埼玉県では本庄台地や高麗川流域に分布が見られるが、谷田川流域とのかかわりは不明である。

以上のことから谷田川流域の3古墳（渕ノ上・筑波山・稲荷塚）は、6世紀後半において館林市、板倉町、明和村の境界周辺に「地域」を形成していたものと考えられる。生産域は谷田川を含む低地帯と思われるが、居住域である集落址は現在のところ発見されていない。遺跡分布調査における台地上に散布する遺物は奈良・平安時代のものが多く、古墳群に見合う古墳時代後期の遺物が散布する包蔵地は見あたらない。関東平野にいくつかの事例が見られるローム台地が埋没している現象などから、当地域においても古墳を築いた人々の居住域が河川の氾濫によって運ばれた土砂で埋没していることも考えられる。

次に、渕ノ上古墳の石室と同様に角閃石安山岩を使用した石室を持つ古墳の分布を見ると、利根川流域（支流を含む）に顕著に現れていることが分かる（第30図）。特に榛名山の噴火により噴出した軽石であることから、群馬県内にその数は集中しているが、栃木・埼玉・茨城県内に

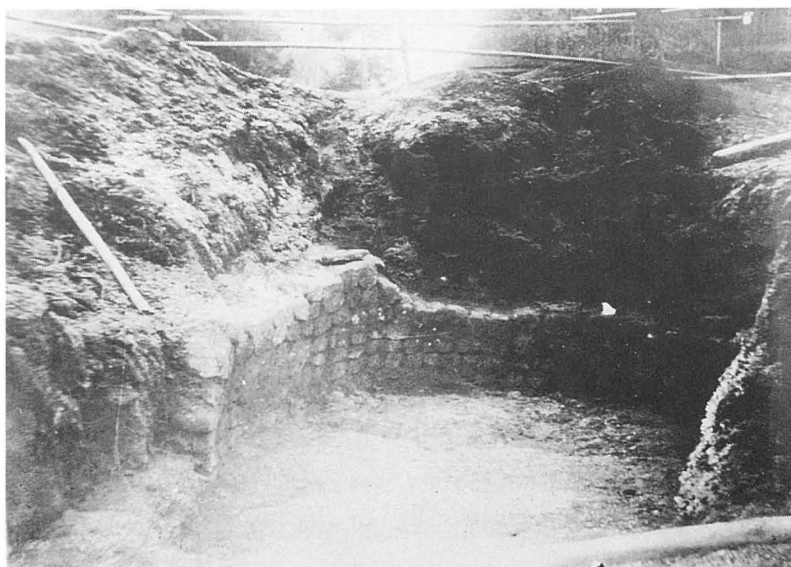
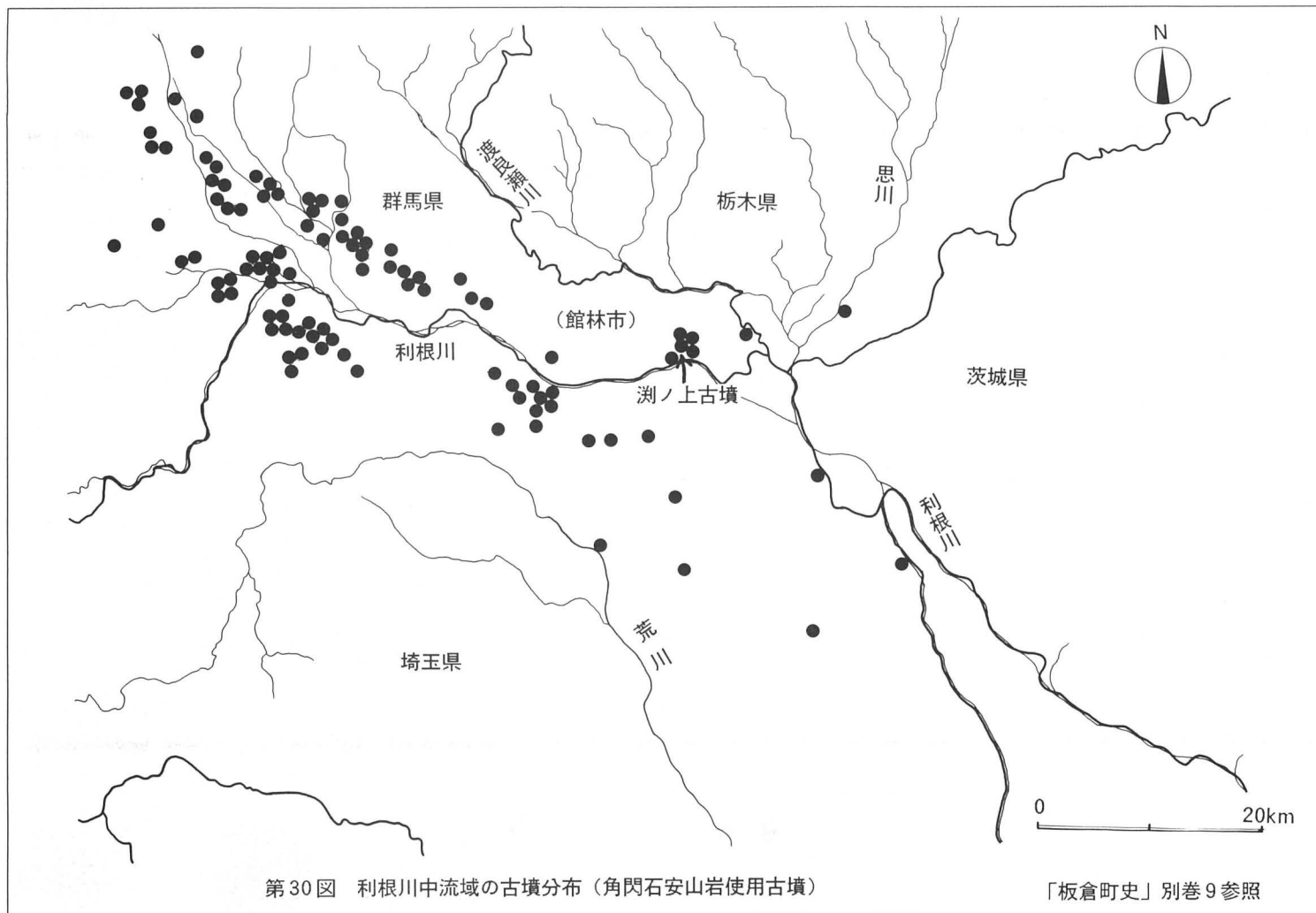


写真7  
筑波山古墳石室  
(飯塚多右衛門氏撮影)  
昭和8年



も利根川およびその支流に沿ってかなり広範囲に分布している。

測ノ上古墳は、群馬県内に集中する角閃石安山岩使用の古墳のグループとは地域的に隔たりが見られ、利根川中流域の中でも下流部に位置する。同様の古墳が周辺の埼玉・茨城県内にも見られ、特に石室が観察できる古墳（復元を含む）も存在する。中でも、利根川南岸の埼玉県行田市若小玉にある八幡山古墳では全長 16.7m の露出した横穴式石室を見ることができ、側壁に用いられている石の一部に角閃石安山岩が使用され、天井石は埼玉県秩父地方産出の緑泥片岩が使用されている。測ノ上古墳においても側壁の裏側に緑泥片岩が使われていることから、角閃石安山岩同様、この地方特有の石材であることがうかがえる。石室の内部は3室に分かれているものの、わずかに「胴張り型」が見られる。

さらに利根川下流に位置する茨城県猿島郡五霞村川妻にある穴薬師古墳も同じく、石室に角閃石安山岩が使用され、平面形は「胴張り型」を呈した古墳である。

この他、利根川を挟み、測ノ上古墳の約 2km 南にある埼玉県羽生市下村君にも古墳群が存在し、そのうち永明寺古墳は全長約 78m の前方後円墳で、これまでの調査により緑泥片岩を使用した竪穴式石室が検出され、6 世紀前半の築造と推定されている。

古墳時代の利根川の流路を想定するのは現況では困難であるが、角閃石安山岩使用の石室の分布を考慮するとともに、測ノ上・筑波山・稲荷塚の 3 古墳に見られる石室の平面形（馬蹄形の玄室）が群馬県内であり類似例が見られないことから、測ノ上古墳の属する地域が利根川南岸に広がる可能性もあることも考えられ、利根川の対岸にあたる地域の古墳との関連性を重視することが今後の課題といえる。



写真 8  
筑波山古墳  
（板倉町）  
神社階段に使用  
されている角閃  
石安山岩